

アルメニアにおける先史文化の解明 —レルナゴーク遺跡の発掘調査(2023年)—

有村 誠 東海大学文学部歴史学科考古学専攻教授

Research on the Prehistoric Cultures of Armenia: The 2023 Excavations at Lernagog

ARIMURA, Makoto Professor, Department of History, Faculty of Letters, Tokai University

1. はじめに

コロナ禍で3年間中断していたレルナゴーク遺跡(アルメニア)の発掘調査を再開した。本稿は、2023年3月に実施したレルナゴーク遺跡の発掘調査に関する報告である。

2000年代の調査を通して、アルメニアにおいて完新世前期～中期にかけて、文化的変遷が十分に理解できていないという問題が認識された(Gasparyan and Arimura 2014)。西アジアの他地域と比べても編年の空白が多いのである。特に、初期農耕集落出現以前の文化の解明、銅石器時代の文化変遷の構築およびクラ・アラクス文化の起源の解明といったテーマが、将来解決すべき重要な課題として指摘された。

現在、レルナゴーク遺跡を発掘している日本・アルメニア考古学調査団の活動は、2013年に筆者とボリス・ガスパルヤンによって始められた。本プロジェクトは、前6千年紀にアララト盆地に出現する初期農耕集落の前段階(完新世初頭)の文化の解明を目的とし、従来、考古学調査が十分に行われてこなかったアラガツ山麓の丘陵地帯を調査地域と定めた。2013～2014年度にかけて実施した踏査によって、アラガツ山南麓にて約60か所で遺跡を確認した(有村・藤井 2015)。発見した遺跡の帰属時期は旧石器時代から中世までさまざまで、遺跡の形態も集落遺跡、洞窟・岩陰遺跡、石器散布地、クルガン、そしてカイト・サイトと多様であった。中でも特筆すべきは、カイト・サイトである。西アジアの内陸部で知られていたこの種の遺跡が、アルメニアにも存在し、また特にこの地域に密集していることが確認されたのである。レルナゴーク遺跡の近辺にもカイト・サイトがあり、過去のシーズンでは試掘調査を実施した(大沼 2023)。

踏査で発見した遺跡の中で、特に完新世初頭に帰属することが有望な遺跡として、レルナゴーク遺跡があった(図1、2)。レルナゴーク遺跡は、アルメニア西部の地方都市アルマヴィルから北西へ約15 km離れた、マスタラ川のテラス上に位置する。この場所は、アラガツ山麓南側の広がる丘陵部(約標高1000～1500 m)の南端にあたる。遺跡からマスタラ川に沿って1 kmも南下すれば、アララト盆地の沖積地に出る。我々の踏査によりマスタラ川溪谷には比較的多くの遺跡が確認されており、例えば、レルナゴーク遺跡のすぐ近くには、ダラリックという小さな洞窟遺跡が発見された。近年、この遺跡の発掘調査が始まり、前期旧石器時代に位置付けられる石器が発見された(Gasparyan et al. 2023)。

2019年までの4シーズンにわたる発掘調査により、レルナゴーク遺跡の居住期間は大きく2期に区分されることが理解された(有村・大沼 2019; Arimura et al. 2018; Petrosyan et al. 2021)。1期は未だ正確な絶対年代は不明ではあるが、およそ前5千年紀と目され、円形遺構の一部(Str. 2)やそれに伴う、生活面が確認された。遺構に伴い発見された遺物には、銅石器時代にしばしば見られる剥片素材の三日月形細石器や、土器片、サドルカーン、石製ビーズなどがあった。2期は、放射性炭素年代測定によって紀元前7000年ごろに年代づけられる。遺構として、粘土を突き固めて構築された壁(Str. 1)が確認された。2期の出土遺物は上層よりも多く、黒曜石製石器が多数出土した。これらの石器には細石器やカムロ・ツールが含まれており、カムロ遺跡と同様のアルメニアの完新世初頭遺跡に典型的な石器群といえる。これらの石器群は後期旧石器時代以来の伝統を受け継ぐ一方で、後続する前6千年紀の新石器伝統「アクナシェン・シュラベリ・

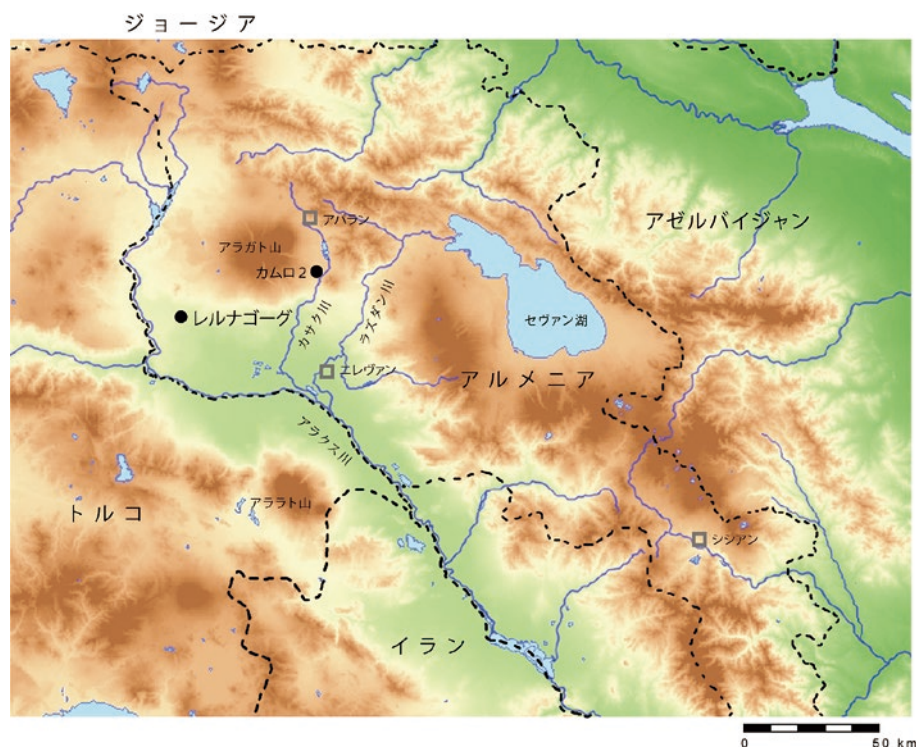


図1 レルナゴーク遺跡の位置



図2 レルナゴーク遺跡の発掘(2023年3月)



図3 レルナゴーク遺跡の発掘区(2023年)

「シムテペ文化」の石器群との差異は大きい(Arimura et al. 2022)。石器に使われた黒曜石は、遺跡の目の前の川原で採取されたものである。マスタラ川によって上流の黒曜石の一大産地アルテニから運ばれてきた転石が多数川原で見られる。一方、黒曜石以外の遺物はそれほど多くなく、磨製石器、骨製品、動物骨が若干出土した。植物遺存体の採取にも努めたが、ほとんど採取できず、有機物の残存状況は極めて悪い。

2. 2023 年調査の概要

今回の発掘調査は2023年3月4日～3月18日にかけて行われた。調査参加者は、日本側が有村誠(日本側代表者・東海大学)、大沼柊平(宮城県教育庁)、銘

苅絹彩、大原一路、劉松染、三上碧依(以上、東海大学文学部歴史学科考古学専攻生)、アルメニア側がアルトゥール・ペトロスヤン(アルメニア側代表者)、アニ・アジギョザルヤン、ハイク・ハイドシヤン(以上、アルメニア国立考古学民族学研究所研究員)であった。

今回の調査の目的は、以前の調査で確認されていたピゼ壁遺構(Str. 1)の構造を理解することと、遺跡の範囲を確認するための新たな試掘調査を行うことであった(図3)。Str. 1は発掘区(Area A)の北側で確認されていたピゼ壁であり、直径2mほどの円形遺構の一部のように見える。壁はそれほど残っておらず、最大で高さ20cm程度であった。このStr. 1を精査したところ、小礫混じりの明褐色の粘土ブロックと大ぶ



図4 Str. 1の構造



図5 Str. 1内出土の黒曜石石器

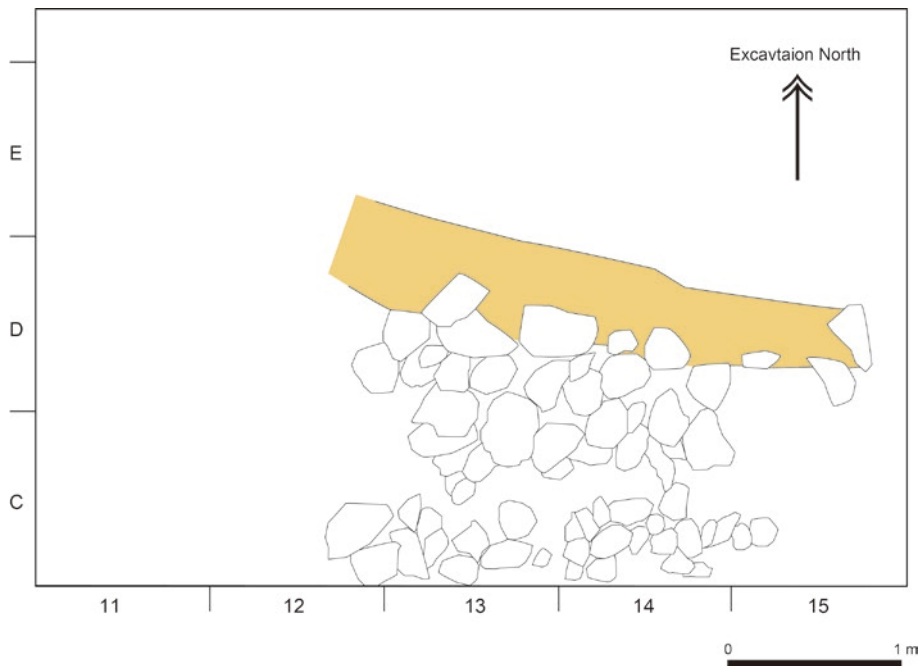


図6 ピゼ壁 Str. 3

りな礫を混ぜて壁としていたことが明らかとなった(図4)。この遺構の性格は不明だが、壁の内側、床面からは黒曜石製石器が水平に分布して発見されることがしばしばあった(図5)。発掘区の南側には1期のStr. 2があったが、その下層から東西方向に延びる別のピゼ壁(Str. 3)を確認した(図6)。Str. 3の南側には大型の礫の集中が見られた。レベルや出土遺物を考えると、Str. 3は上記のStr. 1と同じく2期に属するものと考えられる。一方、発掘区の東側(C/D/E/F/G-17/18/19/20)を掘り下げたところ、1期の生活面と思われる灰褐色の粘土質の土層が発掘区の全面で確認された。この地層では黒曜石製石器の出土は比較的数量が少ない。

発掘区の北側では、2019年の調査時から、かなり

大型の礫が多数確認され、遺跡背後の段丘崖から崩落してきたものだと考えていた。しかし今回の調査で、黄褐色のパミスを確認したことから(図7)、これらが火山碎屑物の堆積であることが確認できた。層位的には、完新世初頭の遺構(Str. 1と3)を含む土層の下層にあたり、レルナゴーク遺跡の基層ということになる。

遺跡の範囲を確認するために、新たに2×2mの試掘をArea Aの約20m東の地点に設定した(Area B: N/O-39/40)。表土直下でシルト質の土層が約20cmほど堆積していることを確認したが、考古遺物はまったく出土しなかった。念のためにさらに掘り下げたが、シルト質土層の下層は玄武岩の角礫層となり、結局、この地点では遺跡の痕跡を確認できなかった。この結果から、レルナゴーク遺跡の範囲はかなり狭く、



図7 発掘区北側で発見された火山砕屑物

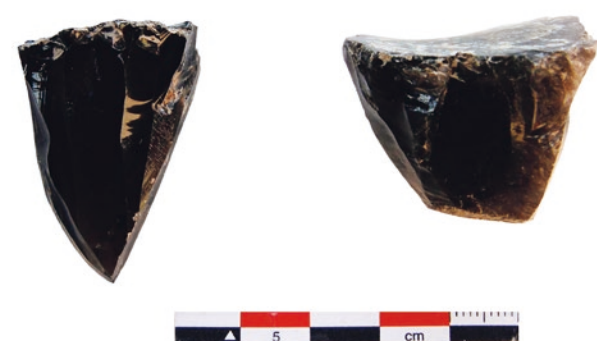


図8 黒曜石製石核

Area A のあたりが主体であることが窺えた。

出土遺物は、これまでのシーズンと同様に、黒曜石製の石器がほとんどであった。石刃石器や細石器など特徴的な道具石器のほかに、単設打面の石核も複数出土した(図8)。黒曜石以外では、炭化物や動物骨が少数出土した。

3. おわりに

3年ぶりのレルナゴークの発掘調査であったが、アルメニア側の協力により、以前と同様に調査を無事に実施することができた。本調査では、遺跡の範囲や層序に関する新たな知見が得られた。特に今回、火山砕

屑物を遺跡の下層で確認したことから、おそらく、現在確認している完新世初頭の地層(前7000年)より古い文化層は存在していないことが推測された。この点、今後の調査で検証していきたい。なお、本調査は文部省科学研究費補助金(基盤研究(B):21H00598、代表:有村誠)によって実施した。

参考文献

- ・ Arimura, M. et al. 2018 A preliminary report on the 2015 and 2017 field seasons at the Lernagog-1 site in Armenia. *Aramazd* 12(1): 1-18.
- ・ Arimura, M. et al. 2022 Exploring the Changes in Lithic Industries during the Neolithisation in Armenia (7th-6th Millennium BCE): A Comparison of Chipped Stone Tools from Lernagog-1 and Masis Blur. In: Y. Nishiaki, O. Maeda, M. Arimura (eds.), *Tracking the Neolithic in the Near East. Lithic Perspectives on Its Origins, Development and Dispersals*. Leiden: Sidestone Press, pp. 489-502.
- ・ Gasparyan, G. and Arimura, M. 2014 Study of the stone age in the Republic of Armenia. Achievements and perspectives. In: B. Gasparyan and M. Arimura (eds.), *Stone Age of Armenia*. Kanazawa: Center for Cultural Resource Studies, Kanazawa University, pp. 13-33.
- ・ Gasparyan G et al. 2023 Dalarik-1: A New Lower Paleolithic Cave Site in the Republic of Armenia. In: Y. Grekhan and A. Bobokhyan (eds.), *Systemizing the Past*. Oxford: Archaeopress, pp. 127-141.
- ・ Petrosyan, A. et al. 2021 A Step Forward to the Neolithization: Early Holocene Sites of the Republic of Armenia. In: P. Avetisyan and A. Bobokhyan (eds.), *Archaeology of Armenia in Regional Context*. Yerevan: Publishing House of the Institute of Archaeology and Ethnography, pp. 26-41.
- ・ 有村誠・大沼柊平 2019「アルメニアにおける先史文化の系譜を探る—アルマヴィル地域における発掘調査(2018年)—」『第26回西アジア発掘調査報告会報告集』12-15頁 日本西アジア考古学会。
- ・ 有村誠・藤井純夫 2015「コーカサスの新石器時代前夜を探る—アルメニア、グルジアにおける考古学調査(2014年)—」『第22回西アジア発掘調査報告会報告集』34-39頁 日本西アジア考古学会。
- ・ 大沼柊平 2023「南コーカサス地域分布カイトサイトの考古学的研究—レルナゴーク・カイトサイト1遺跡と周辺での調査報告を中心に—」『筑波大学先史学・考古学研究』第34号 29-53頁。